

問答連 第十五 瓦版

哲学カフェ第三期

第五回 九月二三日(祝・土) 二時から四時まで

お金って何だろう

〜経済学ではない「お金」論〜

発題者 野崎康夫さん

(「問答連」世話人)

「お金って何だろう」と問われると、「ああ、経済の話しね」とたいていの人が考えます。もちろん経済活動の根幹にお金(貨幣)があるのだからそう考えるのも当然かもしれません。しかし、経済学の分野ではないお金についての考え方も日常的にはかなりの広がりがあります。

お金の諺には、「江戸子は宵越しの金は持たない」とか「金は天下の回りもの」というもの。「猫に小判」や「金の切れ目が縁の切れ目」といのもあります。昔の人は上手いことを言ったものですね。お金の話は思いのほか奥が深いことに気が付きませんか。

今回は参加者の皆さんひとり一人にとつての「お金」を「**」を考えていきたいと思えます。例えば、「お金」必需品「や」「お金」欲望のモラトリアム」と考えることもできます。また、「お金」愛情」だとする考

えかたもあると思えます。あなたはどうか考えておられるでしょうか？

進め方は、ゲストがある考え方を示すのではなく、参加者の皆さんに考えていただける「素材」を提供し、その中であれやこれやと思いを巡らせていきます。あらかじめ種明かしをしておくこと。『哲学のおやつ 仕事とお金』(汐文社)です。このテキストは子ども向けの作りになっていて、働くことから価値が生まれるという「労働価値論」がベースになっています。ですからある意味では「突っ込みどころ満載のテキスト」ということになります。

参加者のみなさんの発想でとても面白い議論ができることを期待しています。これも「哲学カフェ 問答連」のひとつの在り方かでは、と考えています。



贋金作りは罪？

第四回感想

「子ども」を考える

すごく、今回のお話は期待していました。日本人の親子関係の西洋的親子関係との違いや、日本人の倫理(状況倫理、場の文化)の特性(西洋近代との違い)というものに関心があり、その特性が時代の中でどの部分が変質して、どの部分が変わらないのか?そして、日本の社会が抱えている課題を解決していく上で、その特性のプラスマイナスをきちんと考慮に入れていく必要があると思ってきました。ジェームスさんとイザベルさんのお話は、期待通りでした。西洋近代の倫理的基盤そのものが、先進国共通の変質をとげつつある中(トランプ現象は、その典型例でしょうが)、ジェームスさんとイザベルさんのお話は、逆に西洋的な個人主義的倫理観や自立観の根っこが、お二人にとつて、いぜん堅固にあるという印象を強く受けました。教育制度、男女の役割意識の根深さ、子供中心主義(?)などが主な議論の対象になっていましたが、僕自身は、日本の民主主義の機能不全をどんな方向で解決していけるのかということに一番関心があります。今の日本における、ネオリベリズムの競争主義や「自己責任」の言説は、日本人の庶民が持っていたエートスの大切な部分を掘り崩す一方、近代西洋の自立観や倫理観の大切な根っここの部分を欠いているとしか思えません。財政破綻や安倍一強を生む日本人の政治文化

の未成熟や日本人の平和主義の脆弱さを文化の根っこまでさかのぼって考える必要があると思えます。僕自身は、日本人が伝統的にもっていた親子関係や情愛の特質を、マイナスばかりとは、思っていない。ですから、イザベルさんがお話になった人間であり女性である自分のアイデンティティを否定するニュアンスで「おかあさん」と呼ばれる」と感じられる日本の社会の特質を、どう評価し、どう考えていくのか。ジェームスさんの、「移民による人口増の可能性を最初から考慮に入らずに、日本の女の人に生んでほしい」と考える日本社会への違和感という指摘を、どう受け止めるのか。この二つの点が、問題を考える上での、大きなヒントだと感じました。またぜひ、次の機会にこの続きを話し合いたいです。

「子供」「大人」「お母さん」など国によって、個々によって、様々な認識があるんだなと思いました。考える機会をいつもありがとございます。ルワンダのおばあちゃんのことをその人の名前で呼ぶと失礼にあたる。誰でも「マンマ」と呼ぶことで敬意を表しているとのこと。韓国では「**（子どもの名前）のオンマ」と呼ぶのが普通らしい。日本では、子どもができたらいっつのまにか「おかあさん」と連れ合いのことを呼ぶのは、意外とアジア・アフリカに共通の感性かもしれない。ヨーロッパの考え方は違う。さて、どちらが？異文化の方の子ども・子育て・教育観について、直接身近で聞くのは初めてなのでとても興味がありました。ゲストのお二人の話を聴くと、イギリスとドイツの文化の違いはあるものの、個人主義

を超えて自由人だなという印象を受けました。日本人も家族主義の傾向は薄れて、個人主義が定着しましたが、子どもにも自立心を与えようという欧米の個人主義とは違い、親子の密着度（甘え・情緒的關係）は一般人には強いと思われる。しかし、他の参加者の話も聴いていると、子育て・教育というのは自由主義の現代では世界的に、人それぞれに違っている」という強い印象を持ちました。学校制度には文化的違いがよく表れているものの、制度を離れば、親が子どもに求めるものは同じなのでしょう。か、違つのでしょうか。とにかく勉強になりました。皆さんありがとございました。

「子どもの商品化」や「おとなと子どもの境界」など、ジェームスさん、イザベルさんからの話題提供がとても面白かったです。単純に《異文化》としてだけでは割り切れないような違い、その逆の共通点なども感じる事ができました。ただ、哲学力フェ全体としては、みんなで共有しながら話を紡いでいくという雰囲気より、聞きたいこと・話したいことだけを（難しい言葉が中心になって）優先されていた感じがしました。学校の教室ではない、あの雰囲気の中だからこそできる「対話」はなかったように思えて残念です。「子ども」から「大人」になる瞬間？っていつだろつという話は面白かったです。自分の経験から考えると経済的な自立ができた時かなと思えます。ヨーロッパでも同じような考え方でしたが、大学では授業料が無償だということ、日本よりも大人になる（私流の）ハードルが低いように思えました。

今後の予定

【第六回】で「問答連」も最終回になります。今回はやや重いテーマで「死」を取り上げてみたいと思います。ゲストしておいでいただく住田先生は山科区で開業医として患者側に寄り添った医療をされています。そうした実践からテーマとして「医療から見る「死」」についてお話しできます。ご期待ください。

なお、問答連の恒例として、最終回のゲストの方への感謝とお礼を兼ねて、終了後に会場近くのイタリアレストランで会食をさせていただきます。参加ご希望の方は事前に世話人までお知らせください。定員は六名を予定していますので満席になり次第締め切りとさせていただきます。

【第六回】一〇月二八日（土）

【医療から見る「死」】

ゲスト：住田剛一さん（開業医）

会場の案内

会場は、「ムーレック」にて行います。

参加費はワンドリンクオーダーです。

JR京都駅から（約三〇〜四〇分）

市バス二六番『等持院南町』。

市バス五〇番『北野白梅町』下車、徒歩約6分。

京阪三条駅から（約三〇分）

市バス一〇番『等持院南町』。

市バス一五番『北野白梅町』下車、徒歩約6分。

